

(二十九) 馬渡し(まわたし)と馬乗馬場(まのりばば)

鳶ヶ巣城址の麓、西林木と東林木の境界、南方の田園地帯を「馬渡し」と言います。

室町から江戸時代の頃には、斐伊川はこの付近まで北上して西に流れていました。

一帯には沼地が広がりその先には斐伊川が流れていたため道は無く村人が歩いて渡るのには不便だったようです。

そのため、北山沿いの縦縫郷たてぬいのさとに住む人々が斐川村(当時は塩治郷)へ行くには馬を使って斐伊川を渡り人や物を運んでいました。川原には、馬子達の宿舎や馬小屋が立ち並んで、「馬渡し」の名がついたものと考えられます。

また、その西方・阿土谷町内の屋号(大西)・園山正雄氏宅の南方が「馬乗馬場(まのりばば)」と呼ばれています。戦国期の鳶ヶ巣城全盛時代、城下町に住む武将や、騎馬武者達の馬術訓練広場があり、そして鳶ヶ巣城への参道があったため地名として残ったものと思います。

鳶ヶ巣城後期、毛利元就は、鳶ヶ巣に「鉄砲はなし中間ちゅうげん」を派遣したという記録が残っておりますが、この頃から鳶ヶ巣城を守る主役の座が騎馬武者から鉄砲足軽へと移行していき、戦争が鉄砲中心になっていきます。

